

[論文]

# 適応様式の変容にみる第二次世界大戦後の フィンランド外交の論理

高木道子

## 1. はじめに

北欧の一国フィンランドは、第二次世界大戦後の国際政治にあって、その中立外交によって異彩を放ってきた。フィンランドの第二次世界大戦は、東側国境で隣接する社会主義の大国ソ連との冬戦争そして継続戦争に終始した。敗戦国フィンランドの戦後は、この隣国ソ連といかなる関係を結び、フィンランドの国家としての存立を図るか、そして安定した独立を維持していくかにかかっていた。フィンランドは、東側の社会主義国ソ連からの圧力と脅威、南辺における東西ヨーロッパの対決、さらに北方からは米ソのミサイル基地が北極海を挟んで鋭く対峙する状況のなか、必死の中立外交を展開してきたのである。

冷戦期の国際環境のなかで、フィンランドは自国の独立とソ連との「友好関係」を外交の至上命題とし、その手段として中立外交をおこなった。すなわち、東欧の人民民主主義諸国のようにソ連の衛星圏に組み込まれることなく、あくまで西欧型の自由民主主義体制を維持しながら、ソ連に「敵対しない」という意思を示すことによって「友好関係」を築いていくことを目指した。そして、ソ連と限定的な軍事条約を結びつつ、「大国の利害対立の外側に立つ」という中立の立場を採ることで、東西双方に対して一定の行動の自由を確保したのである。冷戦初期、フィンランドは「立場を取らない」という慎重な中立外交に終始したが、徐々に国連を舞台とした積極的な中立外交に打って出るようになり、デタント期には米ソを含む全ヨーロッパ諸国を巻き込んだ安全保障協力会議の開催に尽力するな

ど、中立の立場を生かしたその架橋外交が国際社会の注目を集めるようになった。

冷戦後、ソ連の崩壊によって、第二次世界大戦以後フィンランド外交を規定し続けたソ連との「特別な関係」が解消したことで、中立外交の転換とEU加盟を選択したフィンランドは、積極的なEU政策とロシアとの良好な関係<sup>1)</sup>、そして国際紛争解決のための仲介外交を展開し、ヨーロッパ小国のなかでも特異な存在感を示している。

大国の権力政治と軍事的抗争が渦巻くなかで、小国フィンランドが積み重ねてきた中立外交の論理を読み解くこと、また、冷戦後においては中立外交を仲介外交へと発展させ、頻発する国際紛争の解決にむけて独自の役割を果たそうとするフィンランドの仲介外交の意義を展望すること、これらが本稿の目的である。言い換えれば、フィンランド外交が、冷戦期そして冷戦後の国際政治秩序のなかで果たしてきた役割とその意義を検討することは、国際政治史の現段階を照射し、今後の国際政治のあるべき方向を見定めるうえで不可欠の作業であると考えられる。

## 2. フィンランド外交が提起するもの：問題の所在

フィンランドは、第一次世界大戦中の1917年12月6日に独立を宣言した。独立以前のフィンランドは地政学的位置によって、その帰属がスウェーデンとロシアの狭間で翻弄され続けた<sup>2)</sup>。19世紀初頭、ロシア帝国の統治下でフィンランドは大公国となるが、1917年のロシア十月革命の影響を受け、フィンランド内部でも政権を握るブルジョワ勢力と労働者が支持する社会民主主義勢力の対立が先鋭化し、社会民主党の指導したゼネストが失敗に終わった結果、ブルジョワ諸政党が支持するスヴィンビューヴド政権が、ソヴィエト政権との事前協議なしに独立宣言を発表したのである。宣言の直後、フィンランドでは、権力の奪取による革命を目指す労働者主体の赤衛軍が蜂起し、政権側の白衛軍との内戦へ突入した。激しい戦いの末白衛軍が勝利し、フィンランドは12世紀以来伝統的に維持され

てきた議会制を継承する共和国として、1918年1月ソ連はじめフランス・スウェーデン・ドイツなどヨーロッパ10カ国が承認し、1919年から1920年にかけて多くのヨーロッパ諸国及びアメリカ、日本などが承認していった。

戦間期、フィンランドは国際連盟を重視し、スウェーデンなど他の北欧諸国と足並みを揃えていたが、1935年にイタリアのエチオピア侵略に対して国際連盟が有効な対応を取れずに終わったことで、連盟に不信感を抱き、武装中立の立場をとるようになった。

しかし、1939年8月23日、独ソ不可侵条約<sup>3</sup>でソ連の勢力圏に含まれたフィンランドは、ソ連からの一方的な領土割譲の圧力に晒され、二度にわたってソ連との交戦（冬戦争、継続戦争）<sup>4</sup>を余儀なくされた。圧倒的な軍事力を誇るソ連を前に、フィンランドは国際社会や西欧諸国からの援助を期待したが、冬戦争（1939.11 - 1940.3）では国際連盟は有効な解決策を提示できず、英仏とスウェーデンはフィンランドに同情こそすれ、公的な軍事援助を与えようとはしなかった。冬戦争で失った領土を回復しようと再度ソ連と戦った、1941年からの継続戦争（1941.6 - 1944.9）では、フィンランドはナチス・ドイツの「協戦国（belligerent）」となったが、ドイツの敗戦が決定的になった1944年9月、ソ連とモスクワで単独講和として休戦協定を結び、戦線を離脱したのであった。ソ連との休戦協定や連合国との講和条約の内容をめぐってフィンランドは、英米両国がフィンランドに対する負担を軽減してくれることを期待したが、連合国内の協調政策を優先した英米は、フィンランドがソ連の勢力下にあることを黙認し、ソ連と対決してまでフィンランドを支援する意思を示さなかった。これを見て取ったフィンランドは、ソ連と独力で対峙せざるを得ないという認識に立ち、ソ連とは敵対しないことで友好関係を築くことを戦後外交の主眼としたのである。

ソ・フィン戦争の敗戦国としてソ連の管理下に置かれながら戦後外交を出発させたフィンランドは、冷戦の開始と共に、ソ連からの要請を受けて1948年4月、友好協力相互援助条約（以下、YYA条約）<sup>5</sup>を結ぶ。この

条約が冷戦期のフィンランドの対ソ関係を規定していくのであるが、フィンランドは条約締結時の外交努力により、「フィンランドは大国間の紛争の局外に立つことを希望する」という文言を前文に盛り込むことに成功した。このことによって、冷戦期にフィンランドが中立外交を追求していく可能性が開かれたのである。

冷戦期、ソ連と友好条約を結びながらも中立外交を打ち出したフィンランドは、国際社会において徐々にその存在感を発揮していく。特に60年代末からのデタント期においては、中立国の立場を生かして国連の平和維持活動へ参加するなど、積極的中立政策を展開し、東西間の「架橋役 (bridge-builder, siltarakentaja)」として自らをアピールした。そうした実績の中でも最大の成果とも言えるのが、1975年にヘルシンキで開かれた欧州安全保障協力会議 (CSCE) の成功であった。フィンランドは中立国という自らの立場を前面に出し積極的にイニシアティブを取り、東西の緊張緩和の促進に貢献することで、国際的地位を高めたのである。

70年代末以降、デタントから「新冷戦」の時期になると、フィンランドは一時その積極的外交から後退するが、さらに冷戦後になると、国際環境の変化に迅速に対応し、新たな存在感を示した。なかでもEU加盟 (1995) によって西欧という足場を得たのち、EUの代表として国際紛争の仲介役を引き受けるなど、中立外交の発展とも言える独自の仲介外交を展開した。また、EUを新機軸とした地域戦略では、冷戦後に獲得したより広い外交の選択肢を駆使し、国際的地位の向上に加えて実質的な国益の増大をも目指していった。

以上のように、フィンランドは、ソ連との「友好」関係を主軸とした冷戦期、積極的中立外交を展開したデタント期、さらにEU加盟を果たして西欧の一員としての自覚を獲得した冷戦後と、地政学上の宿命とも言える隣国ソ連 (ロシア) との関係のなかで、国家の生存を確保し、さらなる自律的な外交を切り拓いてきた。フィンランド外交は、大国間の権力政治という現実を生き抜くための「知恵」や「巧みさ」としての小国外交や、戦時・平時において大国間の紛争に関わらないという消極的な意味での中立

外交の範疇に留まるものではなく、国際環境そのものに積極的な働きかけを行い、より望ましい国際秩序を形成するために尽力するなかで、自国の国際的地位の向上に努めてきた。そこで次に、このような独自の道を追求めてきたフィンランド外交について、これまでの研究を概略的に振り返っておきたい。

### 3. フィンランド外交の先行研究

従来のフィンランド中立外交の研究は、小国外交論と「フィンランド化 (Finlandization)」論を中心に展開されてきたと言えよう。

小国外交論は、第二次世界大戦後に盛んに論じられた「小国の凋落」論<sup>6</sup>にたいする反論として生まれ、特にアジア・アフリカの非同盟諸国や、ヨーロッパにおける中立諸国の積極的な外交を高く評価してきた。これは、冷戦という条件の下、核兵器の出現と米ソの軍拡競争の結果、お互いが手出しできなくなるという「核の手詰まり」状況が生まれる状況のなかで、軍事力で勝っている諸大国よりも、中小国が国際問題を解決する際に機動力を発揮していったのである。特にデタント期、東西間の架橋的役割や国連の平和維持活動への貢献などで中小国の存在感が高まり、フィンランドも積極的中立政策を推進する北欧の小国として取り上げられた<sup>7</sup>。米ソ両陣営の対立と、大国間政治が主軸となった冷戦期の国際政治において、ソ連を隣国とする小国フィンランドの展開した外交に国際社会の注目が集まったのである。しかし、そうした小国の積極外交も、70年代末の「新冷戦」下、米ソ対立が激化するなかで存在感の低下を免れなかった。また、冷戦の終結により東西対立の構図が崩れると、中小国が中心となって展開していた非同盟運動、中立外交の意義が薄れていき、小国外交研究もまた下火になっていったと言える。

フィンランドも新冷戦期には抑制的な外交を展開したが、そこでは小国独自の自主的・戦略的外交が繰り広げられており、それが基礎となって冷戦後の積極外交 (EU を機軸とした地域外交、国際紛争における仲介外

交)が可能になったと言える。したがって、第二次世界大戦後から冷戦後までのフィンランド外交の論理を射程にすえる本稿においては、従来の小国外交論だけでは不十分であり、冷戦後の国際秩序における小国外交の存在意義をも視野に入れた分析視角が必要であると考えられる。これについては、後述することとする。

「フィンランド化」論は、冷戦期のソ連＝フィンランド関係を扱い、フィンランドのソ連への「従属」的な外交姿勢を指摘することで、西欧諸国がソ連に対して友好路線を採ることを非難するものであった<sup>8</sup>。W・ラクールによると「フィンランド化」とは、「フィンランドが、ソ連の圧力のもとにソ連に対して譲歩的な対応をとることによって、共産化は免れるものの、次第に外交、ひいては内政までもソ連に支配され、その中立と独立が侵されている」<sup>9</sup>状況だという。こうしたフィンランドの対ソ連外交認識は、冷戦下における西側諸国の保守派の間で広く流布した。特に1960年代末以降、西ドイツのブラント政権が推進したソ連・東欧友好路線、いわゆる「東方外交 (Ostpolitik)」に対する批判として「西ドイツは『フィンランド化』してはならない」という論調が、国際的な注目を集めたのである。

しかし、この「フィンランド化」論にたいしては、冷戦というイデオロギー対立の中であって、ソ連に隣接する非社会主義国の東側に取り込まれる危険性を警告するために、一般化された嫌いがあり、特にフィンランドの歴史研究者から、フィンランドの対ソ連外交の実態を歪めているという批判が寄せられた。本稿もこうした批判に同意するものである。すなわち、第二次世界大戦後のフィンランドの対ソ連外交は、ソ連を敵対視したりあるいは挑発したりするものではなく、ソ連がフィンランドに不信任感を抱くおそれのある要因をあらかじめ除去することに主眼があった。それは、ソ連からの圧力や干渉を誘発する材料を与えないようにするものであり、決して「フィンランド化」論が想定するようなソ連に対する譲歩一辺倒の従属外交ではないということである。

冷戦期を通じてフィンランドは、自主的外交努力を積み重ね、ソ連との

関係を安定させることによって、西側との友好関係を深めることにも成功し、その自律性と国益の増大、そして国際社会における地位向上に努めてきたのである。「フィンランド化」論は、こうしたフィンランド外交の主體的な側面をあまりに軽視した見方だと言わざるをえない。

「フィンランド化」論のなかで本稿が着目するのは、小国外交を「適応政治 (adaptive politics)」論との関係で論じた H・モリッツェンの業績 (H. Mouritzen, *Finlandization: Towards a General Theory of Adaptive Politics*, Brookfield, Avebury, 1988) である。モリッツェンは、それまで「フィンランド化」という言葉で「従属外交」と一括されてきた中小国の外交戦略分析に光を当て、「フィンランド化」論と小国論を総合した一般理論をめざした。モリッツェンの著作については、分析枠組みの提示のところで詳述することにする。

次に日本におけるフィンランド外交の先行業績について言及しておこう。百瀬宏の『東・北欧外交史序説—ソ連=フィンランド関係の研究—』がこの分野における嚆矢であり、初めての本格的な研究である。本書は帝政ロシア時代からのソ連=フィンランド関係から説きおこし、第二次世界大戦中の冬戦争までの両国関係を、近代国際関係の「大国」=「小国」関係の最も先鋭な形で現れた事例として詳細に分析している。また、百瀬宏『小国外交のリアリズム』が、フィンランド中立外交成立期の政治史を扱っており、1944年の休戦協定の締結から1948年のソ連との友好協力相互援助条約の締結に至る政治過程を内政との関係も含めて論じるものである。

この二つの業績に共通している視点は、近代国際関係における「大国」と「小国」の問題、特にパワーに裏づけられた権力政治が支配する国際政治の現実の中で、無力とされがちな「小国」側に焦点を当て、その国際観やそれに基づく対外行動の論理を明らかにすることであると言えよう<sup>10</sup>。後者の『小国外交のリアリズム』では、「小国」の問題から一歩踏み込み、フィンランド外交に見られる小国独自の「リアリズム」を抽出することに成功している。つまり、フィンランドが圧倒的な力 (パワー) を有する社会主義大国ソ連と対峙し、自らを「小国」と自覚するなかで展開していっ

た中立外交は、小国ゆえに持つことのできる鋭敏な現実感覚に支えられており、だからこそ、まったくの無力に陥ることなくソ連に対しても自国の要求を認めさせることができたという主張である。こうした百瀬氏の指摘は、先に述べた「フィンランド化」論に対する明快な反駁となっており、本稿でも同意するものである。ただし、百瀬氏の業績<sup>11</sup>は冷戦期までに限られているため、本稿では冷戦後のEU外交と仲介外交をも射程に収め、さらに「適応様式」という概念でフィンランド外交を捉えることにより、百瀬氏の問題提起を踏まえた上で、新たな理論的視座の提供を試みている。

そのほか石渡利康『フィンランドの中立政策』があるが、この書籍は北欧法の研究者による「中立」概念の変容という点に焦点があり、冷戦終結期からEU加盟前までのフィンランド国内における「中立」をめぐる議論を紹介している。フィンランド中立外交について当時の最新の議論を紹介してはいるものの、本格的な国際政治分析とはなっていない。

したがって、本稿の扱う冷戦期から冷戦後を射程として中立外交さらに仲介外交にまたがる論考は管見の限りいまだなく、さらに以下述べる三つの適応概念を用いてのフィンランド外交論は本稿が最初と言えよう。

#### 4. 分析枠組みの提示

##### — 「適応的黙従」の発展としての三つの適応様式

本稿の分析枠組みは、上記モリッツェンの著作から示唆を得ている。その際、モリッツェンの「適応政治」概念を発展させ、三つの適応様式 (modes of adaptation) を新たに提起することで、冷戦期、冷戦後を通じて展開してきたフィンランド外交の意義を再考したい。

モリッツェンはその著『フィンランド化：適応政治の一般理論へ』において「フィンランド化」が表す適応様式を「適応的黙従 (Adaptive acquiescence)」と捉え、その概念を詳細に検討している。しかし、モリッツェンの「適応的黙従」は、フィンランド、スウェーデン、デンマー



クを含む北欧の中小国に広く当てはめた概念であるため、フィンランド外交を分析対象として扱う本稿では、この概念をさらに深く掘り下げる必要がある。フィンランド外交の独自性を強調する際には特に、「適応的黙従」に留まらず、さらに発展させた概念を提起したい。それが本稿で示されるフィンランド外交の三つの適応様式—「Reactive adaptation（応答的適応）」、「Proactive adaptation（先行的適応）」、「Manipulative adaptation（操作的適応）」である。これら三つの適応様式を説明する前に、まずモリツェンの「適応的黙従」の内容を紹介しておこう。

モリツェンは、適応的黙従を以下の通り定義する<sup>12</sup>。

1. 一定の政治体制（a regime）がその最も重要な環境から真の圧力を受けており、その圧力は基本的な体制の価値に挑戦するものである（これが適応的黙従の通常の状態）。
2. 政治体制は、こうした圧力に適応している。適応的黙従は一あるいは他のいかなる適応の様式も—論理的に最低限の自律性を持つアクターを前提にする。
3. 政治体制の圧力に対する適応の方法は宣言された体制の価値の侵害を継続的に許容すること（これらの価値に関する妥協を与えること）にある。適応的黙従は、したがって、積極的意欲（enthusiasm）とともにではなく、むしろある一定の諦観（resignation）とともに実行される。
4. 侵害／妥協は当然何かとの交換において許容される、何かとはつまり、少なくとも政治体制の価値の中核を維持できる蓋然性の増大である。このことが適応的黙従の目的である。‘維持’の意味するところは、たしかに、政治体制がすでに保持している何かの管理ということである。不都合な条件が行き渡っていることを考慮に入れると‘新たな’価値を獲得することは期待できない。この条件3と4を一緒に考えると、当該政治体制は進んで継続的な価値の喪失という事態を受け入れようとすることを意味する。

この適応的黙従の概念を対外政策に敷衍するならば、「国家が内政外交において自律性が脅かされるほどの圧力を受けたとき、独立という国家の体制的価値を最低限維持するために、外部からの圧力を敢えて甘受していく外交手法」と言える。しかしこの適応的黙従の概念に含まれる「黙従」の側面においてのみフィンランド外交を捉えるのでは不十分である。例えば、デタント期にフィンランドが展開した「積極的中立政策 (aktiivinen puolueettomuuspolitiikka)」は、国家の独立維持のためには自律性の低下を甘受しなければならないという諦観によってではなく、国際環境に働きかけ、自らの国際的地位の向上を目指すというまさに積極的意欲によって遂行されたのである。また、与えられた国際環境に規定されながらも、その規定要因そのものに働きかけていくことで、国家の独立の維持に留まらない自律性を獲得してきたのである。

したがって、モリツツェンが「適応的黙従」の概念の中で提起した「適応」の側面、すなわち、大国や国際環境からの圧力に一定の自律性を持って敵対することなく応じるという行動様式は、まさにフィンランド外交の基礎であることに注目したい。したがって本稿では、フィンランドの適応様式を「黙従」という側面から焦点を当てるのではなく、「適応」の側面を評価し、フィンランド外交をさらに三つの適応様式に分類して提示したい。

この三つの適応様式の分析に当たっては、具体的な外交実践に見られる適応の実態とその変容を動的に捉えるために、「適応の規定要因」、「適応の対象」、「適応の方法」、「適応の目的」という視点から論じてみよう。

まず、「適応の規定要因」としては、フィンランドを取り巻く国際環境の変化が挙げられる。それは、第二次世界大戦直後の連合国の協調政治、冷戦の進行、デタント、新冷戦、冷戦の終結、ソ連の崩壊、さらにEUなどの地域統合の深化や地域紛争の頻発などである。こうした国際環境の変化をフィンランドの指導者がいかに認識してきたか、すなわちフィンランド大統領のそれぞれの時期の「国際政治認識」があり、それに従って「適応の対象」と「適応の目的」が定まっていく。

次に「適応の対象」については、フィンランドに隣接し一定の圧力を与

えうる大国としてのソ連（ロシア）と西欧諸国（EU）、北欧、さらに国際社会（国連）を挙げることができよう。冷戦期の第一の適応対象は、相互援助条約を結ぶ大国ソ連であって、西欧は二次的な位置に留まっていた。冷戦からデタントへと国際環境が変化するなかで、フィンランドの適応対象はソ連を最優先させながらも、広く国際社会にたいして積極的中立政策や東西間の架橋役を担うことで適応対象を拡大していった。この時期、ケッコネンが主導した中立外交によって西側諸国との経済関係が拡大したが、主要な適応対象は引き続きソ連であり、国際社会でのイニシアティブや北欧協力への関与も、ソ連の意向に反しない範囲で行われた。新冷戦から新デタントへ至る転換期には、依然としてソ連が第一の適応対象でありつつも、フィン・ソ関係が安定化するなかで、それまでソ連への配慮から自制してきた北欧政策、国連政策を目立たない形ではあるが修正・発展させることになった。冷戦後になると、隣国のソ連が崩壊し、フィンランドがEUに加盟したことで、主要な適応対象は西欧（EU）に移っていく。そこでは、ロシアは二義的な位置に後退するが、特に経済分野において隣接国家としての重要性は失うことはなかった。また、冷戦後の国際環境への適応として、EUの枠組み内における地域協力の推進や、地域紛争の仲介などの外交実践が見られるようになった。

国際環境という規定要因の変化、それに対する政治指導者の国際政治認識が変化することで適応対象が選定され、それに応じて「適応の方法」も変化してきた。この方法を分類したのが、Reactive、Proactive、Manipulative という三つの適応様式である。

まず「Reactive adaptation（応答的適応）」とは、適応対象からの圧力や国際秩序を所与としつつも、それに対して自主的に応答することで国家の独立を維持し、さらに一定の自律性を獲得する適応様式である。冷戦が始まりソ連からのYYA条約締結の圧力に応じつつも、フィンランドはソ連の隣国として独立を維持するために、Reactive adaptationによって中立政策という選択肢を追求し発展させていくのである。

また「Proactive adaptation（先行的適応）」は、適応対象の意向を先取

りし、それに対し自らの国際秩序観に沿って積極的、主体的にイニシアティブをとることで、所与の国際社会での地位向上と外交の選択肢の拡大を目指す適応様式である。デタント期の国連PKOへの参加や軍縮政策の推進、北欧非核地帯構想の提唱に見られる積極的中立政策がこの適応様式の典型と言えよう。特に、1975年のCSCEヘルシンキサミットの成功は、フィンランドが東西間の架橋役として国際社会に存在感をアピールする絶好の機会となった。

冷戦後のフィンランドは、隣国ソ連の崩壊という状況を受け、外交における選択肢が拡大する中で、EU加盟後「西欧の一員」という新たなアイデンティティを獲得した。「Manipulative adaptation(操作的適応)」は、フィンランドがその国際的地位と実質的利益を上げるために、規定要因や適応対象を所与とするのではなく、それ自体に主体的に働きかけて誘導してこうとする適応様式である。それが見られるのは、EUの共通政策に対する積極的貢献や、EUを機軸にした地域戦略においてである。また、フィンランドは、地域紛争が頻発するという冷戦後の国際環境の中で、EUの代表として紛争の仲介役を引き受け、国際紛争の解決への意欲を見せることを通じて、EUおよびフィンランドの紛争処理能力と国際的地位の向上を目指している。

これら三つに共通する「適応の目的」は、フィンランドの自律性を維持、増大するために、埋没しがちであったアイデンティティを呼び覚まし、それを外交において実質化していくことである。それぞれのアイデンティティの代表的なものとしては、Reactive adaptationでは、「ソ連の兄弟国ではない隣国」、Proactive adaptationでは「東でも西でもない東西間の架橋役」、Manipulative adaptationでは「西欧の一員」と「EUの優等生」そして「国際紛争の仲介役」が挙げられよう。ここでは、冷戦期のアイデンティティは、冷戦という所与の国際環境に大きく規定されたものであったのに対し、冷戦後のアイデンティティは、フィンランドがEUに加盟することで主体的に選び取ることができたものであった、という点を強調しておきたい。

## 5. おわりに

ここまで、第二次世界大戦後のフィンランド外交の論理を明らかにする予備的考察として、フィンランド外交の提起するもの、歴史的概略、先行研究を概観した上で、分析枠組みの提示を行った。

フィンランド外交の特筆すべき点としては以下の二点が挙げられるだろう。一点目は、第二次世界大戦後ソ連と軍事的に結びつけられながらも、粘り強く中立外交を展開し、西側諸国とも関係を深め、東西間の架橋役として国際社会での存在感を示してきたこと。二点目は、冷戦後にEU加盟を果たすことで新たな外交の選択肢と自らのアイデンティティを獲得する中で、冷戦期の中立架橋外交では不可能であった、大国間の利害調整役として仲介を任されるに至ったこと、である。このことは、冷戦の終結によって「中立」や「非同盟」の意義が低下する中で、オーストリアやスウェーデンなどの他の旧中立国、あるいはユーゴスラヴィアなどの非同盟諸国が存在感を失っていったことと対照的であると言えよう。そこには、冷戦期から冷戦後を通じてフィンランドが培ってきた独自の国際政治観と外交実践の積み重ねがあり、それが本稿で提示した三つの適応様式に見られるのである。

この点をさらに詳らかにするため、冷戦期、デタント期、冷戦後という国際環境の変化のなかで、フィンランドの外交実践が、どのような国際政治理解に基づいて、どのように具体的に行われてきたかを、主にフィンランド語文献や公刊された外交一次資料を用いて検討することを次の課題としたい。

## [注]

- 1 フィンランドは、EU加盟（1995）後から現在に至るまで、ロシアと良好な関係を維持するため、NATOには非加盟のままである。しかし近年、ウクライナ問題においてロシアがクリミア併合など強硬な態度に出たことから、フィンランドでも安全保障の不安が叫ばれ、NATO加盟論議が活発化している。
- 2 フィンランドは1155年にスウェーデンに併合されるが、1323年にロシア（ノヴゴロド王国）との国境が画定するまで、両国の間で揺れ動いた。スウェーデンとロシアがバルト海の覇権をめぐる戦った大北方戦争（1700 - 1721）の結果、西カレリア地域がロシアへ割譲され、ナポレオン戦争でのスウェーデン敗退に至って、フィンランドはロシア帝国に併合された（1809）。（百瀬宏『北欧現代史』山川出版社、2000年、27～28頁、53～54頁、75～76頁。）
- 3 独ソ不可侵条約の「秘密議定書」において、ソ連はフィンランド・バルト三国・ポーランド東部を自国の勢力圏とすることについてドイツの了解をとりつけている（同上、246頁）。
- 4 冬戦争に関する日本における本格的な研究として、百瀬宏『東・北欧外交史序説：ソ連=フィンランド関係の研究』福村出版、1970年が挙げられる。
- 5 正式名称は、「フィンランド・ソ連友好協力相互援助条（Sopimus ystävydestä, yhteistoiminnasta ja keskinäisestä avunannosta）」である。
- 6 戦間期に「大国・小国平等」の理念のもと国際連盟の貢献者として小国の存在感が大きくなったが、国際連盟の実効力の欠如が明らかとなり、ひとたび第二次世界大戦が勃発すると、中立と独立を標榜していた諸小国は次々と大戦に巻き込まれていった。そのため、第二次世界大戦後には再び大国を中心とした権力政治が国際政治を支配し、小国は其中で無力な存在でいるほかはないという「小国の凋落」の状況が論じられるようになったのである。
- 7 小国外交の代表的な業績として以下のものが挙げられる。A.B. Fox, *The Power of Small States: Diplomacy in World War II*, Chicago, University of Chicago Press, 1959, D.Vital, *The Inequality of States: A Study of the Small Power in International Relations*, Oxford, Oxford University Press, 1967, D. Vital, *Survival of Small States*, Oxford, Oxford University Press 1971, R.L. Rothstein, *Alliances and Small Powers*, New York, Columbia University Press, 1968, 百瀬宏『小国—歴史に見る理念と現実—』岩波書店、1988年。
- 8 「フィンランド化」論に関する代表的な業績として以下のものが挙げられる。  
K. Gruber, *Zwischen Befreiung und Freiheit*, Vienna, 1953, N. Ørvik, *Sicherheit auf*

*finnische*, Stuttgart, 1972, G. Ginsburgs and A. Z. Rubinstein (eds.), *Soviet Foreign Policy Toward Western Europe*, New York, Praeger Publisher, 1978, W.Laqueur, *The Political Psychology of Appeasement: Finlandization and other unpopular essays*, New Brunswick, Transaction Books, 1980.

- 9 W.Laqueur, *The Political Psychology of Appeasement: Finlandization and other unpopular essays*, New Brunswick, Transaction Books, 1980, p.7.
- 10 百瀬宏『東・北欧外交史序説：ソ連=フィンランド関係の研究』福村出版、1970年、3頁。
- 11 百瀬氏の他の業績として重要なのは以下の通りである。百瀬宏編『ヨーロッパ小国の国際政治』（東京大学出版社、1990年）では「フィンランド」の章で、フィンランド外交の概説と冷戦終結期のフィンランド外交に触れているが、執筆時期の限界により、情勢分析にとどまっている。また百瀬宏『小国—歴史にみる理念と現実—』（岩波書店、1988年）では、国際政治研究における「小国」の問題について歴史的理論的に検討しているが、フィンランドは「北欧中立国」の一例として扱われているのみである。最後に百瀬宏『北欧現代史』（山川出版社、2000年）では、フィンランドにも多くの紙幅が割かれており、冷戦後の状況も扱われてはいるが、世界現代史シリーズという性質上、概説的な記述に終始している。
- 12 H. Mouritzen, *Finlandization: Towards a General Theory of Adaptive Politics*, Brookfield, Avebury, 1988, pp.61-62.

#### [参考文献]

##### フィンランド語文献

##### (書籍)

- M. Ahtisaari, *Tehtävä Belgradissa*, Helsinki, Werner Söderström Osakeyhtiö, 2000.
- J. Blomberg, *Vakauden kaipuu : Kylmän sodan loppu ja Suomi*, Helsinki, Werner Söderström Osakeyhtiö, 2011.
- H. Hakovirta, *Suomettuminen: Kaukokontrollia vai rauhanomaista rinnakkaiselo?*, Jyväskylä, Gummerus, 1975.
- M. Jakobson, *Tilinpäättös*, Otava, 2003.
- U. Kekkonen, *Suomen turvallisuuspolitiikka: Tasavallan presidentti Urho Kekkosen turvallisuuspoliittisia puheita vuosilta 1943-1979, 2. painos*, Helsinki, Maanpuolustustiedotuksen suunnittelukunta, 1982.

- S. Keränen, *Moskovan Tiellä: Urho Kekkonen ja Neuvostoliitto 1945- 1989*, Keuruu, Otava, 1990.
- H. Meinander, *Tasavallan tiellä: Suomi Kansalaissodasta 2000-luvulle*, Espoo, Schilts, 1999.
- H. Meinander, *Suomen historia: Linjat rakenteet käännekohdat*, Helsinki, Werner Söderström Osakeyhtiö, 2010.
- J. K. Paasikivi, *Paasikiven Linja I: Juho Kusti Paasikiven Puheita Vuosilta 1944-1956*, Porvoo, Werner Söderström Osakeyhtiö, 1958.
- J. K. Paasikivi, *Paasikiven päiväkirjat, 1944- 1956, 1*, Porvoo, Werner Söderström Osakeyhtiö, 1985.
- J. K. Paasikivi, *Paasikiven päiväkirjat, 1944- 1956, 2*, Porvoo, Werner Söderström Osakeyhtiö, 1986.
- P. Väyrynen, *Suomen Linja*, Paasilinna, 2014.  
(論文)
- S. A. Havrén, ”Meillä ei ole ikuisia ystäviä eikä ikuisia vihollisia. Ikuisia ovat meidän omat etumme: Suomen suhteet Kiinan kansantasavaltaan 1949-1989”, Väitöskirjat, Helsingin yliopisto, 2009.
- J. Limnell, “Toimiiko turvallisuus- ja puolustuspoliittinen selontekomenettely?”, *Julkaisusarja 4*, Maanpuolustuskorkeakoulun julkaisuja, 2008.
- M. Niskanen, ”Tasavallan presidentin ulko- ja turvallisuuspoliittinen päätösvalta Suomen valtiosäännössä”, Väitöskirja, Lapin yliopisto, 2009.
- V. I. Punasalo, “The Reality of ‘Finlandization’: Living under the Soviet shadow”, *Conflict Studies*, Institute for the Study of Conflicts, London, No. 93, March, 1978.

#### その他外国語文献

(書籍)

- R. Allison, *Finland's Relations with the Soviet Union, 1944-84*, London and Baskingstoke, Macmillan Press, 1985.
- A. B. Fox, *The Power of Small States: Diplomacy in World War II*, Chicago, University of Chicago Press, 1959.
- J. M. Hanhimäki, *Containing Coexistence: America, Russia, and the “Finnish Solution”*, The KentStateUniversity Press, 1997.
- R. H. Jackson, *Quasi-States: Sovereignty, International Relations, and the Third World*, Cambridge, CambridgeUniversity Press, 1993.



- M. Jakobson, *Finnish Neutrality: A study of Finnish Foreign Policy since the Second World War*, New York, Frederick A. Praeger, 1969. 上川洋訳『フィンランドの外交政策』日本国際問題研究所、1979年。
- M. Jakobson, *Finland in the New Europe*, Westport, Praeger Publisher, 1998.
- R. Kullaa, *Non-alignment and its origins in Cold War Europe: Yugoslavia, Finland and the Soviet Challenge*, London, I.B. Tauris, 2012.
- W. Laqueur, *The Political Psychology of Appeasement: Finlandization and other unpopular essays*, New Brunswick, Transaction Books, 1980.
- G. Maude, *The Finnish Dilemma: neutrality in the shadow of power*, Oxford University Press, 1976.
- H. Mouritzen, O. Wæber, H. Wiberg, *European Integration and National Adaptations: a Theoretical Inquiry*, New York, Nova Science Publishers, 1996.
- H. Mouritzen, *Finlandization: Towards a General Theory of Adaptive Politics*, Brookfield, Avebury, 1988.
- R.E.J. Penttilä, *Finland's Search For Security Through Defence, 1944-89*, London, Macmillan, 1991.
- R. L. Rothstein, *Alliances and Small Powers*, New York, Columbia University Press, 1968.
- T. M. Ruddy (ed.), *Charting An Independent Course: Finland's Place in the Cold War and in U.S. Foreign Policy*, California, Regina Books, 1998.
- D. Vital, *Survival of Small States*, Oxford, Oxford University Press 1971.
- D. Vital, *The Inequality of States: A Study of the Small Power in International Relations*, Oxford, Oxford University Press, 1967.
- J.P. Vloyantes, *Silk Glove Hegemony: Finnish-Soviet Relations, 1944-1974: a case study of the theory of the soft sphere of influence*, The Kent State University Press, 1975.
- (論文)
- E. Berndtson, "Finlandization: Paradox of External and Internal Dynamics", *Government and Opposition*, London, Vol. 26, No.1, 1991.
- P. O. Järvenpää, "Finland: An Image of Continuity in Turbulent Europe", *Annals of the American Academy of Political Social Science*, Sage Publications, Vol. 512, Nov., 1990.
- E. Karsh, "Finland: Adaptation and Conflict", *International Affairs*, London, Vol. 62, No. 2, Spring, 1986.
- J. Ker-Lindsay, "Between 'Pragmatism' and 'Constitutionalism': EU-Russian Dynamics and Differences during the Kosovo Status Process", *Journal of Contemporary European*

- Research*, UACES, London, Volume 7, Issue 2, 2011.
- B. Kovrig, “Eastern Europe out of the cold; Finlandization and beyond”, *Diplomacy and Statecraft*, London, Frank Cass, Vol. 1, No. 3, 1990.
- W. R. Mead, “Finland in a Changing Europe”, *The Geographical Journal*, London, Vol. 157, No. 3, Nov., 1991.
- P. A. Petersen, “Scandinavia and the “Finlandization” of Soviet Security”, *Proceedings of the Academy of Political Science*, New York, Vol. 38, No. 1, 1991.
- V. I. Punasalo, “The Reality of ‘Finlandization’: Living under the Soviet shadow”, *Conflict Studies*, Institute for the Study of Conflicts, London, No. 93, March, 1978.
- G. H. Quester, “Finlandization as a Problem or an Opportunity?”, *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Philadelphia, Vol. 512, Nov., 1990.

## 日本語文献

### (書籍)

- 石渡利康『フィンランドの中立政策』高文堂出版社、1992年。
- 塚本哲也『フィンランド化:ソ連外交の論理と現実』教育社、1978年。
- M・ハイキオ(藪長千乃訳)『フィンランド現代政治史』早稲田大学出版社、2003年。
- 百瀬宏編『ヨーロッパ小国の国際政治』東京大学出版社、1990年。
- 百瀬宏『小国外交のリアリズム—戦後フィンランド1944-1948年』岩波書店、2011年。
- 百瀬宏『北欧現代史』山川出版社、2000年。
- 百瀬宏『小国—歴史に見る理念と現実—』岩波書店、1988年。
- 百瀬宏『東・北欧外交史序説:ソ連=フィンランド関係の研究』福村出版、1970年。

### (論文)

- 石垣泰司「戦後の欧州情勢の変化とフィンランドの中立政策の変貌」『外務省調査月報』第2号、2000年。
- 斉木伸生「〈研究ノート〉フィンランド安全保障政策の将来—欧州安保秩序構築への模索と適応—」『北欧史研究』第14号、1997年。
- 鈴木徹「冷戦の終焉とフィンランドの東方政策」『外務省調査月報』第1号、1998年。
- 玉木衛「フィンランド対ソ外交の一考察—フィンランド化の発生から見た一側面—」『道都大学紀要』第5号、1982年。
- 永井陽之助「国際政治における小国の役割」『国際問題』第162号、1973年。
- 前田聡子「〈研究ノート〉ケッコネン政権下のフィンランド外交—「フィンランド

化」論の検証に寄せて一』『北欧史研究』第16号、1999年。

前田聡子「『フィンランド化』論再検証』『北欧史研究』第13号、1996年。

三輪芳明「EU加盟後のフィンランドの安全保障問題：冷戦後欧州の安保秩序構築と中立国の対応』『国際政治』第112号、1996年。

百瀬宏「戦後フィンランド史試論—日本との関わりで何が見えるか—』『北欧史研究』第23号、2006年。

百瀬宏「ソ連外交と北欧中立主義の変遷』『国際問題』第228号、1979年。

百瀬宏「フィンランド外交—対ソ友好と小国中立』『国際問題』第162号、1973年。